

## 「統一思想の観点からみた脳の構造と機能 ～ 潜在記憶の解放に関して」

鈴木重裕 Ph. D., M. D.

### <序論>

人間の健康状態をコントロールするのに重要な役割を果たしているのが間脳である。しかし、様々な病気が存在するという事は、間脳が十分な機能を果たせずにいるということに他ならない。その原因は何であろうか？それは一言でいえば「記憶」なのである。

記憶は、記録、保持、想起の三つのプロセスよりなるが、記憶には想起意識を伴う「顕在記憶(implicit memory)」と想起意識を伴わない「潜在記憶(explicit memory)」がある。意識して活用できる顕在記憶にはエピソード記憶と意味記憶があり、一方、意識して活用できない潜在記憶には、身体運動、条件反射やプライミング現象（先行した刺激が後続の刺激の処理に促進効果を及ぼすこと）などが関与する。従来の研究によると、記憶は脳のいたるところに、さらには身体の細胞一個一個に至るまで分散されているが、担当する領域が定まっている記憶機能があることも事実である。顕在記憶は主に海馬と大脳皮質などの新しい脳に蓄積され、潜在記憶は大脳基底核や扁桃核、小脳などの古い脳に蓄積される、としている。また、私たちの潜在意識は、宇宙が創生されてからすべての記憶にアクセスして、瞬時にして膨大な記憶を立ち上げているという。私たちが認識しているのは顕在意識であるが、その 100 万倍の記憶が 1 秒間のうちに潜在意識の中で立ち上がっているのである。つまり、記憶全体から見ると顕在記憶は氷山の一角であり、記憶のほとんどが潜在記憶であるといつてよい。その潜在記憶が、人間の言動や行動に多大の影響を与えているのは確かである。

ところで、間脳は潜在意識と深い関係があり、潜在意識の中に潜在記憶が存在するが、その中で悪影響を及ぼし続ける「否定的な」記憶が問題である。その記憶とは、消したくても消し去ることのできない苦痛を伴った過去における忌まわしい記憶であり、これが心に棘のように突き刺さっていると心は痛みを感じ否定的感情が湧いてくる。さらにその痛みには耐えきれなくなるとそれは怒りに変わり、他人もしくは自分を責め、傷つける。しかもそれですべてが終わるのではなく、新たな悲劇を伴うさらなる記憶を作り出すことになるのである。

それでは、それを解決するためには、どのようにしたらよいのであろうか？統一思想の観点からみた脳の構造と機能を念頭におきながら、潜在記憶の解放について医学的観点から考察してみたいと思う。

## <本論>

よく知られていることだが、人間には DNA が存在し、自分の DNA は自身が生まれた時に初めて作られたものではなく、それは親から与えられたものである。親もまた、その親から DNA を引き継いできた。つまり、自分の中には先祖、さらには人類始祖の DNA までもが存在している。ここで、最初に DNA と潜在記憶との関係について述べてみたい。

従来から様々な研究がなされてきたが、利根川（1939～）が免疫機構において遺伝子を再構成し、その遺伝子が多種多様な抗体を作り出していることを発見したことは重要である (Tonegawa, 1987)。これは、遺伝子は両親の遺伝子を受け継いでいるが一生不変であるということはない、という内容を示唆するものであり、また最近の DNA のメチル化を含むエピジェネティックな遺伝子変化の研究結果からも、先祖から DNA に継承された記憶（情報）の影響を否定することはできないのである。つまり、多細胞生物の体細胞では、核内の DNA の塩基配列と関係なく、後天的な作用、例えば栄養分やストレスなどの感情によって、DNA や DNA 分子と結合しているタンパク質に化学的変化が生じて遺伝子の発現が制御され、その結果、細胞の性質が変化し細胞分裂を経ても、しかもその変化は DNA が二重らせんによって次世代に受け渡されるのと同様に、確実に世代を超えて受け継がれるという現象が知られているのである (Reik & Walter, 2001; Surani, 2001)。このエピジェネティックな現象は、DNA の塩基配列の変化のみが遺伝形質の変化を引き起こすとするセントラル・ドグマ（ダーウィン説）では説明できない (Lipton, 1977a: 1977b; Jablonka & Lamb, 1995)。

統一思想の立場から見れば、原相の二性性相の理論に基づいて、全ての存在は、性相と形状の二性性相を持っているのである (UT, 43)。すなわち、DNA も心的要素と物質的要素から構成されており、そこには心理作用と生理作用が並行して行われている。よって、過去の経験による「記憶」という心的要素が DNA そのものの生理作用の変化をもたらし、同様にその生理的变化が人間の心的変化をもたらしてきたことは想像するのに難くない。従って、先祖から伝わる膨大な量の記憶（情報）が、DNA を通じて私たちの中に存在していることは十分に示唆されるのである。そして、その記憶の中には、愛されなかったという記憶を中心に、悲しく寂しかった記憶、時には恨んだりしてきた等の数々の記憶があり、それが引き金になって否定的な感情が湧き出てくるのであろうと思われる。その感情をコントロールして平穏な心へと変えていくためには、潜在するこれらの記憶を解放していかなければならない。そこでまず重要なのは、顕在記憶と潜在記憶との関係である。

顕在記憶は、事実についての知識を符号化することによって得られる。海馬と側頭葉の初期のやりとりが決め手となるこの記憶は、意識の影響を直接受け

る。一方、潜在記憶は、一度覚えたら意識しなくてもこなせる技能や習慣を貯蔵したものであるが、大脳基底核と小脳が関係し、またこの記憶は間脳にも影響を与えている。顕在記憶と潜在記憶をつかさどる部位の違いは、最近の多くの研究によってさらにはっきり示されつつあるが、相互に関係し合っているのも事実である (Ratey, 2002)。

統一思想の観点から言えば、記憶とは認識に際して主体があらかじめ持っている観念や概念をいい、特に潜在記憶は、根源的には DNA の分子配列との関連があるとみていた (Lee, 1985) が、多くの DNA のエピジェネティックな現象がそれを証明しつつあることは既に述べた通りである。

ところで、記憶に重要な影響をもたらすのは「情動」であり、大脳辺縁系に存在する扁桃体が中心的役割を果たしているとされている。しかし、情動を構成する反応は実に多種多様である。重要な点は次の三つである。第一は、脳は非常に少数の脳部位から情動を誘発しているということ。主な情動誘発部位は四つあるが、その内の三つが皮質下にある。すなわち、扁桃体、視床下部と前脳基底部、脳幹部であり、これらの間脳レベルのニューロンは、それより上位のいくつかの脳部位に、セロトニン、ドーパミン、モノアミン、ノルエピネフリンという神経伝達物質（脳内ホルモン）を放出し、多くのニューロン回路の作動様式を一時的に変えていく。また皮質部位には前頭前・腹内側領域がある。第二は、これらの部位が様々な情動の処理に様々な程度で関わっているということ。例えば悲しみは、前頭前・腹内側皮質、視床下部、脳幹を活性化するが、怒りや恐れは、前頭前皮質も視床下部も活性化しない。脳幹の活性化はこの三つの情動すべてに見られるが、視床下部と前頭前・腹内側の強い活性化は悲しみに特有のものなのである。第三は、これらの部位のいくつかは、いくつかの情動を意味する刺激の識別にも関わっているということ。例えば、扁桃体は嫌悪や喜びを識別したり学習したりすることにはほとんど関わりをもっていないが、恐れを識別し、恐れを表現するために必要不可欠であることがわかっている (Damasio, 1999)。

それでは、情動がなぜ、記憶の固定化を増強するのであろうか？それは情動の変化によって生じるホルモンの影響であらうと考えられている。例えばストレスを受けると副腎から二種類のストレスホルモンが放出されるが、ストレスが弱いときは副腎皮質からコルチゾールだけが放出され、ストレスが強いときはそれに加えてアドレナリンも放出される。コルチゾールは、脳幹の孤束核や扁桃体外側基底核、あるいは大脳皮質に入り込み、記憶の固定化を増強する。またアドレナリンは迷走神経を介して脳幹の孤束核の神経細胞を刺激し、扁桃体内にノルアドレナリンが放出される。扁桃体内の受容体にノルアドレナリンが結合すると、コルチゾールの作用が強まり記憶の固定化が促進されるのであ

る。その最たるものが PTSD (心的外傷後ストレス障害) である。また逆に、ストレスホルモンであるアドレナリンの活動をブロックすることによって、PTSD の発生が抑制されたり軽減されたりする可能性を示す実験結果も多くみられる。

ところで、記憶を含む意識において、顕在意識と潜在意識との関係はどの様になっているのであろうか。統一思想の観点からまとめると、顕在意識は間脳と連動した大脳皮質の働きを中心とした肉身レベルの意識であると考えられる。一方、潜在意識は生心を中心とする霊人体レベルの意識であると考えられ、実際、肉心の作用に深く関わる間脳レベルの機能に多大な影響を与えていることがわかっている。さらに、この両者は共鳴し授受作用が生じているが、リベット (1916~2007) らの研究によって脳と顕在意識との関係がはっきりしてきた。すなわち、意志は行動が始まる約 50 分の 1 秒前に現れるが、脳内の波動はほぼ確実に意志より約 30 分の 1 秒前に現れることを発見したのである (Libet et al., 1983; Libet, 1985)。言い換えると、脳の波動は何かをしようとする意志を自覚する前に働くことがわかったのである。これによって、潜在意識がまず脳を刺激し、その刺激された脳が顕在意識を生じさせ、さらにその顕在意識が「習慣」や「情動」によって潜在意識へ刷り込まれていくという、潜在意識、脳、顕在意識の間にはループが形成されていることがわかる。そしてこれによって、生前の記憶が霊人体に刻み込まれていくのであろう。

それでは、潜在意識の中に棘のように刺さっている潜在記憶を解放するためにはどうすれば良いのであろうか？ 前述したように、ストレスホルモンであるアドレナリンの活動をブロックする薬物療法も対処療法としては有効ではあるが、完治させるまでには至っていない。なぜなら、心に痛みを伴うような情動によって固定化された記憶は、痛みとは正反対の癒しの情動によってこそ真に解放されうると考えるのが妥当だと思われるからである。心理学的、認知行動療法的側面から今までに癒しのための様々な方法が試みられてきているが (Vitale, 2008)、注目すべきものに、清平 (韓国) 修練会における霊性治療がある。これは、霊的な癒しというよりはむしろ神霊治療とみなされうるが、悪霊分立と先祖の解怨、祝福役事によってなされる。この神髄は、神の真の愛、み言、悔い改めによって、霊肉ともに、真に健康な姿へと実際に導くものである。ここでは、心を集中して祈祷や瞑想を行いながら、リズムに合わせて全身を自分の手で叩く健康打法が用いられている。悪霊を分立するこのスタイルは、チャクラを解放、活性化し、浄化するための大切な方法でもあり、その効果は真の愛に包まれることによってさらに高められていくのである。これによって、否定的な潜在記憶が解放され、その結果、苦痛を伴っていた顕在的な「エピソード記憶」も喜びと感謝に満ちた「意味記憶」へと転換されていくのであろう。

また、この霊性治療は音楽療法の一つとして捉えることもできる。日本音楽

療法学会の定義によれば、音楽療法とは「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」とされている。近年のようなストレス過多社会や高齢化社会の到来によって、より多くの人々が音楽療法を行うようになってきており、その治療効果も広く知られるようになってきた。

もちろん、多くの専門家が指摘するように、音楽療法には未解決な部分も少なくない。音（楽）を要素的に分析し分類して客観的な方法論を確立することや、治療効果をどのように測定しどのように評価するのかといったようなこと、さらにはより効果的な治療モデルをたて、それを類型化して加療に応用することは、「治療」を標榜する音楽療法において急を要する事柄と言える。

音楽療法には、大きく「受動的音楽療法」と「能動的音楽療法」の2つがあるとされる。前者は、主に音楽を鑑賞することによる心理的効果を狙ったものであるのに対し、後者は実際に楽器を演奏したり歌を歌ったりすることによって、心理的・生理的な治療効果を意図したものであると言える。これは、音楽にあわせて手を叩いたり、あるいは歌を歌ったりすることが加療の中心となり、そこで使われる楽器は太鼓等の打楽器が中心となる。清平（韓国）修練会における霊性治療はまさに後者に相当する。

しかしながら、常時、清平修練会に参加することは容易なことではない。そこで、清平修練会に連結でき、なおかつ清平修練会での効果を高めるための問題解決システムが必要であろう。そこで注目すべき方法として、ハワイの伝承ヒーリング「ホ・オポノポノ」を挙げることができる。

これはもともと、400年前からハワイの人たちに伝わっていた問題解決の方法であるが、<ホ・オ>はハワイ語で「目標」、<ポノポノ>は「完璧」を意味し、<ホ・オポノポノ>は、完璧を目標として「修正すること」もしくは「誤りを正すこと」ととらえることができる。

古代ハワイ人によると、誤りとは過去の痛ましい記憶に汚染された思考から生じるのであり、<ホ・オポノポノ>は病気をもたらず痛ましい記憶を解放する方法を提示している。これを現代版にしたものがSITH (Self Identity Through Ho'oponopono)であり、これは、ハワイの伝統医療の専門家で「ハワイの人間州宝」でもあるシメオーナ女史(1913~1992)が開発し、ヒューレン(1938~)がそれを普及している。

ヒューレンによると、物事が完璧でなくなるのは、潜在意識の中の過去の否定的記憶が再生されて、現在に投影されるからであるとしている。よって悩みを再生する記憶を消去してゼロに至らしめ、無限の心に対して、「悔悛(Repentance)」と「許し(Forgiveness)」と「変質(Transmutation)」を「神聖

なる存在 (Divinity)」に請い求めることを主張するのである。言い換えると、否定的な記憶を意識から解放し、潜在意識をクリーニング(浄化)することが重要だとしている。そのための方法とは、次の4つの言葉、すなわち「ごめんなさい」「許してください」「ありがとう」「愛しています」という言葉を用いて「神聖なる存在」に繰り返し語りかけることである。「神聖なる存在」とは神のことであるが、ここで重要なことは、私たちの意識の中に「神聖なる存在」が既に存在していることである。「ホ・オポノポノ (SITH)」によって記憶が消去(解放)されるプロセスは次の六つである (Vitale & Hew Len, 2005)。

- ① 顕在意識から潜在意識にクリーニングを通じて記憶消去の要求が届く。その要求は該当する記憶を揺らし、変容・消去へと誘う。
- ② 顕在意識から潜在意識に働きかけた記憶の消去要求が、超意識へと上がっていく。(ここでいう超意識とは、常に「神聖なる存在」と一体化していて、人間の潜在意識と「神聖なる存在」を結びつける役割を果たす意識のことであるとしている。)
- ③ 超意識は潜在意識から届いた消去要求を再度吟味し、適切な修正を加え「神聖なる存在」に取り次ぐ。
- ④ 「神聖なる存在」は、超意識から取り次がれた記憶の消去要求を受け取る。そして、記憶を変容させるエネルギーを超意識に放出する。
- ⑤ このエネルギーは、超意識、顕在意識を通して、潜在意識にある該当の記憶に達する。記憶はこのエネルギーによって中和され、やがてゼロになって消去される。
- ⑥ このゼロ(空)になったスペースに「神聖なる存在」から超意識・顕在意識を通してインスピレーションがやってくる。

但し、記憶の消去が起きるためには一つ的前提がある。それは「顕在意識」「潜在意識」「超意識」の三者が一つになっていることである。そのためには、潜在意識を愛して慈しむことが大切だという。

もちろん、このようなホ・オポノポノの考え方は、何も新しい考えではない。仏陀の「色即是空、空即是色」の考え方や、イエス・キリストの「汝の敵を愛しなさい」と言った従来の教えと共通するものである。すなわち、すべての原因は自分の「外」にあるのではなく自分の潜在意識の「なか」にあり、自分の「神聖なる存在」に繰り返し語りかけることを通して、潜在意識の中の情報(記憶)を愛することによってそれを消去(解放)することができるのである。つまり、これらの4つの言葉は人間の本来の性稟(本性)からのみ発せられる言葉であることを考えると、これらの言葉に人間の本心が共鳴し、心が愛によって満たされ、その結果、苦痛を伴う記憶が解放されていくのであろうと思われる。

「ホ・オポノポノ (SITH)」は、多様な文化的・社会的背景からなる南北アメ

リカや欧州で実践され、国連、ユネスコ、WHO（世界保健機構）、ハワイ大学など、様々な国際会議や高等教育の場へも紹介されてきた。この有効性は、罪を犯した精神障害者の収容施設での取り組みでの効果（Vitale & Hew Len, 2005）や、高血圧の治療にも顕著な効果（Kretzer et. al., 2007）をもたらした点でも高く評価されている。

それでは、否定的記憶が解放され、潜在意識がクリーニングされるに従って、最も大きく変わる点は何であろうか。それは、インスピレーションによって「自分が本当に願っていること」がはっきりイメージされ、しかも必ず実現するという「実感」が生まれることだと思われる。イメージされていることが実感されると、間脳の働きが中心になって忠実に「実現されていく」のである。

人は誰しも「願い」を持っているが、多くの場合はあきらめをとまなうことが多い。それはなぜか？その理由は、できないことが既に「実感」されているからである。いくらプラス思考しようと顕在意識を働かせ努力したとしても、潜在意識の圧倒的な力に勝っていくのは容易なことではない。これは、身体や人生をコントロールするには、ただ単に「肯定的に考える」だけでは十分ではないことを意味する。潜在意識の強力なあきらめの実感に対抗しようとしても疲れるだけであり、しかも失敗すればできなかった自分を責めることにもなり兼ねず、さらにあきらめの実感を強化するだけである。つまり、様々な願いがあったとしても、その実感が願いと逆であれば、できないイメージがいつも浮かんでくるために、間脳はそれを「自分の願い」だと錯覚し、実現しようとしてしまうのである。肯定的思考を試みて失敗する原因は、「潜在意識」に潜んでいるあきらめの実感に気づかないところにある。

しかし、記憶が解放され、潜在意識がクリーニングされると、「自分の本当の願い」を知り、「できる」という実感が湧いてくる。人間には、「願いを実現すると気持ちいい」と考えたとき、実際に行うよりも先に脳内にドーパミン（快楽性をともなう脳内ホルモン）が流れ、その行動に向かわせるという潜在意識の「プライミング現象」がみられるが、この促進効果も手伝って、自分自身が変わり、また、その波動が周りの人間関係にも良い影響を与えるので、当然環境も変化することになる。このようにして「願い」は実現されていくのである。

しかしながら、これらの方法で人間の否定的な潜在記憶が次々に解放されていったとしても、それでも最終的に解決できない問題がある。それは統一原理によって明らかにされた内容であるが、人類始祖が陥ってしまったサタンとの因縁によって発生した「原罪」という潜在記憶である。この問題はサタンとの血統が絡んでいるため、サタンが屈服しない限りは人間自身の努力とインスピレーションのみでは到底解決できるものではない。従って、全人類においては、「真の父母」による「血統転換」が必要であるという結論が得られるのである。

今回のテーマである潜在記憶の解放に関して最も決定的な影響を与える究極の情動とは何か。それは「真の愛」である。この「真の愛」について、最後に、文亨進様のスピーチを引用して本論を終えたいと思う。「私たちの歴史は、イエス様からは犠牲の愛、仏教からは慈悲の愛、イスラム教からは絶対忠誠を学んできた歴史であった。しかしながら、『真の父母』は今もなお、地獄に落ちる人々の為に死んで真の愛を与えてくださり、私たちの身代わりに幾度となく死の道を歩んで来られている。『真の父母』の『真の愛』は、人類を天国に導く為に幾度も死なれたという愛であり、人類歴史上の最高の愛である。『真の父母』に五大聖人が屈伏したのは『真の愛』なのである (Moon, 2009)。」

### <結論>

最近の DNA のエピジェネティックな遺伝子変化の研究結果から、後天的な情動によっても先祖から DNA に継承された記憶（情報）の影響を否定することはできず、その影響は確実に世代を超えて受け継がれている。そして、その記憶が引き金になって湧き出てくる否定的な感情をコントロールして平穏な心へと変えていくためには、潜在するこれらの記憶を解放し、消去していかなければならない。記憶の解放に重要な影響をもたらすのは「情動」である。

潜在意識の中の潜在記憶を解放するための方法として注目すべきものに、清平（韓国）修練会における霊性治療があり、また問題解決システムとして、ハワイの伝承ヒーリング「ホ・オポノポノ」がある。否定的記憶が解放され、潜在意識がクリーニングされるに従って、最も大きく変わる点は、「自分が本当に願っていること」を実感できることである。潜在意識をクリーニングしていけば、否定的記憶に影響されることなく、インスピレーションを正しく受けとめることができ、自分の「本当の願い」が実感できるようになる。これによって、潜在意識の「プライミング現象」の促進効果も手伝って、「願い」は実現されていくのである。

しかしながら、これらの方法で人間の否定的な潜在記憶が次々に解放されていったとしても、それでも最終的に解決できない問題がある。それは、人類始祖が陥ってしまったサタンとの因縁によって発生した「原罪」という潜在記憶である。この問題は、サタンとの血統が絡んでいるため、サタンが屈服しない限りは人間自身の努力とインスピレーションのみでは到底解決できるものではない。

従って、全人類においては「真の父母」による「血統転換（祝福）」が必要なのである、という結論を得る。そして、潜在記憶の解放に関して最も決定的な影響を与える究極の情動とは「真の愛」なのである。



(ご清聴ありがとうございました。)

## *References*

- Damasio, A. (1999). *The Feeling of What Happens; Body, Emotion and the Making of Consciousness*. VINTAGE BOOKS, London.
- Jablonka, E. & Lamb, M. (1995). *Epigenetic Inheritance and Evolution: The Lamarckian Dimension*. Oxford, Oxford University Press.
- Kretzer, K. et al. (2007). Self Identity Through Ho'oponopono as Adjunctive Therapy for Hypertension Management. *Ethnicity & Disease*, Vol. 17, Issue 4, September: 624-628.
- Lee, S. (1985). *The End of Communism*. UTI.
- Libet, B. et. al. (1983). Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential). The unconscious initiation of a freely voluntary act. *Brain*, 106: 623-642.
- Libet, B. (1985). Unconscious cerebral initiative and the role of conscious will in voluntary action. *Behavioral and Brain Sciences*, 8: 529-566.
- Lipton, BH. (1977a). A fine structural analysis of normal and modulated cells in myogenic culture. *Developmental Biology* 60:26-47.
- Lipton, BH. (1977b). Collagen synthesis by normal and bromodeoxyuridine-treated cells in myogenic culture. *Developmental Biology* 61:153-165.
- Moon, H. (2009). The words by Moon Hyung Jim Nim on the 24<sup>th</sup> of July in Kurume.
- Ratey, JJ. (2002). *A User's Guide to The Brain*. Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.
- Reik, W. & Walter, J. (2001). Genomic Imprinting: Parental Influence on the Genome. *Nature Reviews Genetics* 2: 21+.
- Surani, MA. (2001). Reprogramming of genome function through epigenetic inheritance. *Nature* 414: 122+.
- Tonegawa, S. (1987). Somatic Generation of Immune Diversity. Nobel lecture, December 8.
- Unification Thought Institute. (2005). *New Essentials of Unification Thought; Head-Wing Thought*. Tokyo: UTI-JAPAN.
- Vitale, J. (2008). *The Key; The Missing Secret for Attracting Anything You Want*. Hypnotic Marketing, Inc.
- Vitale, J. & Hew Len, I. (2005). *Zero Limits: The Secret Hawaiian System for Wealth, Health, Peace & More*. John Wiley & Sons, Inc.